

—夏季大学雑感—

第21回夏季大学「新しい気象」講座雑感

日本気象協会北海道支社 中田 琢志

第21回夏季大学「新しい気象」は、去る7月28・29日に開催され、38名の受講者に参加いただきました。

今年度は、IUGG（国際測地学・地球物理学連合総会）札幌大会のアウトリーチ（市民向けプログラム）の一環としての位置づけでもあり、受講者の熱心な質問が多くみられました。

1日目は、札幌市青少年科学館で「気象学がつくる理科実験」（講師：大阪教育大学名誉教授 山下晃氏）、「宇宙天気とは何か」（講師：北海道大学大学院理学研究科教授 渡部重十氏）の講義と館内見学を行いました。

山下講師は、理科教育での気圧と水圧の教え方への問題提起と、フラスコの中の雲の生成実験を行いました。噴水実験や小鳥の水飲み実験を受講者の前で実演されましたが、簡易圧力計を用いての検証もあり、大変わかりやすいものでした。また、フラスコの中には鮮やかな彩雲ができ、受講者は目を輝かせて見入っていました。

渡部講師は、オーロラと宇宙天気のお話をされました。豊富な映像を用いてわかりやすく説明していただきました。地球磁場は変化しており、鎌倉時代には北海道でもオーロラがよく見えたらしいというお話もありました。強力な太陽風はオーロラだけでなく通信障害を伴うが、近年は予報が出されているとのことでした。

2日目は、札幌管区気象台で「地球温暖化：大気と海の二酸化炭素」（講師：北海道大学大学院地球環境科学研究科教授 吉川久幸氏）、「観測から予報まで—TVに出ない天気予報—」（講師：日本気象協会北海道支社 松岡直基氏）の講義と台内見学を行いました。

吉川講師は、地球温暖化における炭素循環研究のバックグラウンドと大気と海洋の二酸化炭素のやりとりについてお話されました。この分野は未知のことも多く、世界各地で精力的研究が進められているという印象でした。日本はこの分野では海洋定線観測、CO₂の高精度観測、航空機によるCO₂観測で大いに貢献しているとのことでした。

松岡講師は天気予報、気象観測についての歴史的経緯から現在の状況までを豊富な映像を用いてわかりやすく説明されました。気象衛星などの高度な観測技術と数値計算により、現在は予測精度は向上したが、原理的な限界もあるとのことでした。天気予報はTVに出ているものだけでなく、土石流の予測などさまざまなものがあるという紹介がありました。

今回の講座では、ほぼ半数は初めての参加者でしたが、19回目の参加という方をはじめ、数回目という参加者もいらっしゃいました。

最後になりましたが、今回の講座開講にあたりましてご尽力いただいた講師の方々、札幌市青少年科学館、および札幌管区気象台の皆様に、厚くお礼申し上げます。



理科実験（山下講師）



受講風景（札幌管区气象台）